

甲虫ニュース

No. 141
March 2003

COLEOPTERISTS' NEWS

エノキミツギリゾウムシ (コウチュウ目: ミツギリゾウムシ科)
の生態と分布について

吉武 啓・堤内雄二

Biological Notes and Distributional Information on
Eterozemus celtis (LEWIS) (Coleoptera: Brentidae)

Hiraku YOSHITAKE and Yûji TSUTSUMIUCHI

緒 言

大部分のミツギリゾウムシ科甲虫は、その名の示す通り、少なくともメスが錐のように細く伸長した口吻を有する。しかしながら、中には顕著な性的2型を示さず、雌雄共に短い口吻しか持たないグループも少なからず含まれている。一般にゾウムシ類の口吻形態は産卵習性と密接な関係にあるため、ミツギリゾウムシ科における上記の違いは産卵習性の違いを直接的に反映するものと考えられる。

KLEINE (1938) はミツギリゾウムシ科の生態に3型を認めたが、その後、ZIMMERMAN (1994) が MORIMOTO (1962, 1976b) に従ってアリモドキゾウムシ属 *Cylas* LATREILLE を本科に含めた上で4型にまとめている。彼らの区分によれば、生きたサツマイモ類の茎や塊茎に穿入する *Cylas* と好蟻性のオニミツギリゾウムシ族 *Eremoxenini* を除く大多数のミツギリゾウムシは枯死材穿孔者である。それら材穿孔性の種は、その産卵習性から 1) 材外部から産卵を行うグループと 2) 他の甲虫類の穿孔を利用して材内部に卵を産下するものと大別される。前者には、メスが細長く発達した口吻を有し、材部に深く穿った孔に産卵する多くの分類群と発達した口吻の代わりに小型で扁平な体を有し、樹皮の剥落した箇所を探索し、あるいは樹皮下に潜り込み、辺材表面の隙間に卵を産み付けるヒラタミツギリゾウムシ族 *Stereodermini* などが含まれる。一方、後者は極めて特徴的な形態と生態を有するホソミツギリゾウムシ亜科 *Cyphagoginae* のホソミツギリゾウムシ族 *Cyphagogini* によって代表される。

Cyphagogini は69属から成り (ALONSO-ZARAZAGA & LYAL, 1999)、細長い円筒形の体や雌雄同形の短い口吻を有すること、前胸側縁が腿節の当たる付近で強く圧せられることなどで特徴づけられる (cf. 森本, 1979)。本族では、その構成属の1つであるホソミツギリゾウムシ属 *Cyphagogus* PARRY の複数の種において、成虫がキクイムシ科 *Scolytidae* やナガキクイムシ科 *Platypodidae* 甲虫の坑道内に、入り口を塞いでいるオス個体 (guardian male) を排除した上で潜入して産卵を行い、孵化した幼虫がその坑道を起点として材部に穿入することが報告されている (BEESON, 1925; BROWNE, 1961)。結果としてコロニーの破壊に繋がるこのような習性は坑道内寄生 (gallery parasitism or nest parasitism) と呼ばれ、同族の *Calodromus* GUERIN やその他いくつかの属でも見られることが同著者らによって示唆されている。

したがって、*Cyphagogini* の持つ形態的特徴は材穿孔性甲虫の坑道を利用するための適応形質である可能性が高く、*Cyphagogus* とその近縁属以外の分類群も同様の習性を持つことが予期される。しかしながら、上記数属以外の生態に関する報告はこれまでに全くと言って良いほどなされていないため、同族内において材穿孔者に関連した生態がどこまで普遍的なものか不分明というのが現状である。また、*Cyphagogini* の属間で認められる形態的差異は、属ごとに坑道内環境に対する生態的特殊化の程度が異なる可能性を強く示唆するものであり、生態が未知の分類群を対象とした調査が必要とされていた。



Fig. 1. Habitus of *Eterozemus celtis*.
Scale bar: 1.0 mm.

1996~2003年にかけて、筆者らは、エノキミツギリゾウムシ属 *Eterozemus* SENNA (Cyphagogini) の1種であるエノキミツギリゾウムシ *Eterozemus celtis* (LEWIS) を数回にわたり採集する機会に恵まれた。その際に得られた生態的知見は、*E. celtis* の記載時に材穿孔性甲虫との関連性が示唆されている (LEWIS, 1884) もの、これまでほとんど知られていなかった *Eterozemus* の習性および Cyphagogini における生態的な差異を把握する上で非常に重要と考えられるものであった。また、我々が検した標本の中には未記録地のもも含まれることから、稀種であり、その分布情報すら不十分である *E. celtis* の分布域を明らかにするために、これまでの分布記録を整理することは有意義であると思われた。

本論文において、我々は野外での観察を通して得られた *E. celtis* の生態的知見を報告し、同族他属の生態的特徴との関連性や本種の寄生範囲について議論する。さらに、従来の分布記録に我々が得た産地データを追加した上で分布図を作成することにより、本種の分布状況の整理も行いたい。

材料と方法

対象種. *Eterozemus celtis* (Fig. 1) は体長 6.0~6.5 mm の小型種である。本種は本州および九州においてその分布が確認されており、現在、以下の産地からの記録がある：静岡県榛原町および熊本県人吉市、肥後、鹿児島県佐多町 (LEWIS, 1884; 森本, 1979, 1989; 杉本, 2000)。本種の記載者である LEWIS (1884) は、人吉の球磨川河川敷に生育するエノキ *Celtis sinensis* PERSOON 大木の樹皮が剥がれ落ち、木肌の露出した部分より本種が得られたことから、エノキの属名 *Celtis* をその種小名として与えた。また、彼は辺材表面に穿たれた小孔 (*Ptinus* か *Platypus* によるものと記している) を本種の成虫が入り出すところを観察した上で、"This species is formed for traversing the perforations of wood-borers, but not the same degree of eccentricity shown in the next genus, *Cyphagogus*." と述べている。本種の属する *Eterozemus* には、これまでに東洋区から 15 種の存在が知られている (DAMOISEAU, 1979) が、*E. celtis* 以外の生態的知見は皆無である。

調査地および検視標本. 1) 長崎県対馬峰町木坂, 1 ex., 27. VII. 1996, 堤内採集・保管。2) 大分県臼杵市東神野, 60 exs., 6. III. 1999, 堤内採集, 堤内・吉武保管; 109 exs., 27. III. 1999, 堤内採集・保管。3) 大分県緒方町傾山, 3 exs., 6. VII. 2002, 堤内採集, 堤内・吉武保管; 3 exs., 7. VII. 2002, 堤内採集・保管; 3 exs., 13. VII. 2002, 堤内採集・保管; 2 exs., 16. II. 2003, 関 章弘および堤内, 吉武採集, 吉武保管。4) 鹿児島県屋久島大川林道, 2 exs., 27. VII. 1998, 松本慶一採集, 吉武保管。

1)~3) 地点では筆者らが実際に調査を行い、4) 地点の事例に関しては採集者からその状況の教示を受けた。また、本種の分布状況を把握するため、上記データに加えて LEWIS (1884) および MORIMOTO (1976a), 杉本 (2000) の記録を引用した。

結 果

生態. 臼杵市では、コナラ *Quercus serrata* MURRAY など構成されており、やや乾燥気味の雑木林にあるかなり古いエノキの切り株より多数の *E. celtis* 成虫が得られた。すべてタマムシ *Chrysochroa fulgidissima* (SCHÖNHERR) 幼虫の坑道に沿ってかなり接近した状態で蛹室を形成していたものである (Fig. 2, 3)。芯部へほぼ直角に向かう約 10 cm の坑道 1 本につき 20 ほどの蛹室が見られ、樹皮下の食痕からはゾウムシが見出されなかった。*C. fulgidissima* の坑道は材表面の古びた脱出口で終わっていたことから、本種は明らかに使用済みの坑道を利用していたと考えられた。なお、翌年に再度採集地を訪れ、同じ切り株で採集を試みたが、材の様子が一変しており、1 個体も採集することができなかった。

傾山では、カシ類の優先する明るい 2 次林内 (Fig. 4) にある樹皮の剥落したアカメガシワ *Mallotus japonicus* (THUNBERG) MUELLER (ARGOVIENSIS) の立ち枯れ (Fig. 5) において、かつて他の材穿孔性甲虫 (カミキリムシ類か?) が形成したと思われる古い脱出口 (Fig. 6) より頭部を覗かせていた個体や同株に寄生しているカワラタケ中に潜んでいたものを採集した。その後、2003年2月中旬に再び採集地を訪れ、材からの割り出しを

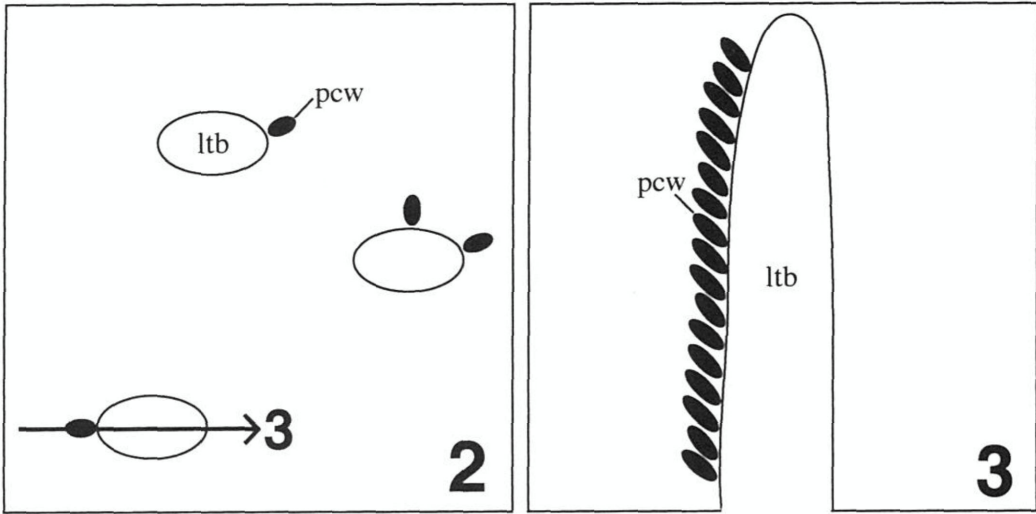


Fig. 2. Longitudinal section of larval tunnels of *Chrysochroa fulgidissima* in an old stump of *Celtis sinensis*, showing the location of pupal cells of *Eterozemus celtis*.

Fig. 3. Transverse section of one of the tunnels. ltb: larval tunnel of *C. fulgidissima*. pcw: pupal cell of *E. celtis*.

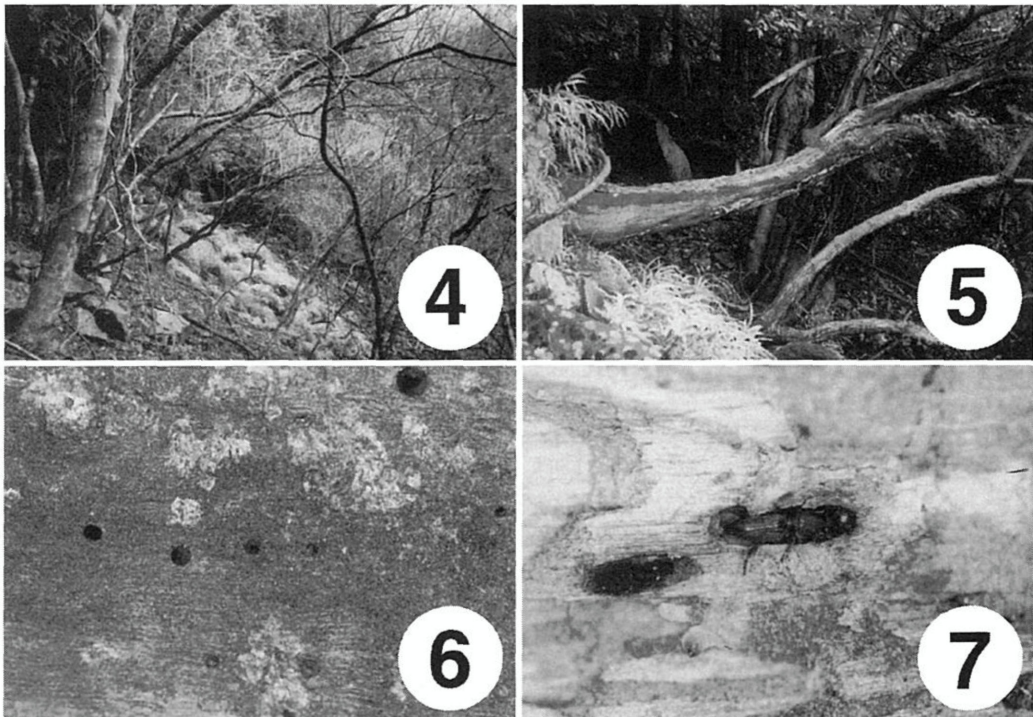


Fig. 4-7. Photographs of *Eterozemus celtis* biology. —4, a habitat in Oita Prefecture; 5, a dead wood of *Mallotus japonicus*; 6, old perforations of an undetermined woodborer on the dead wood; 7, an adult found from the inside of the dead wood.

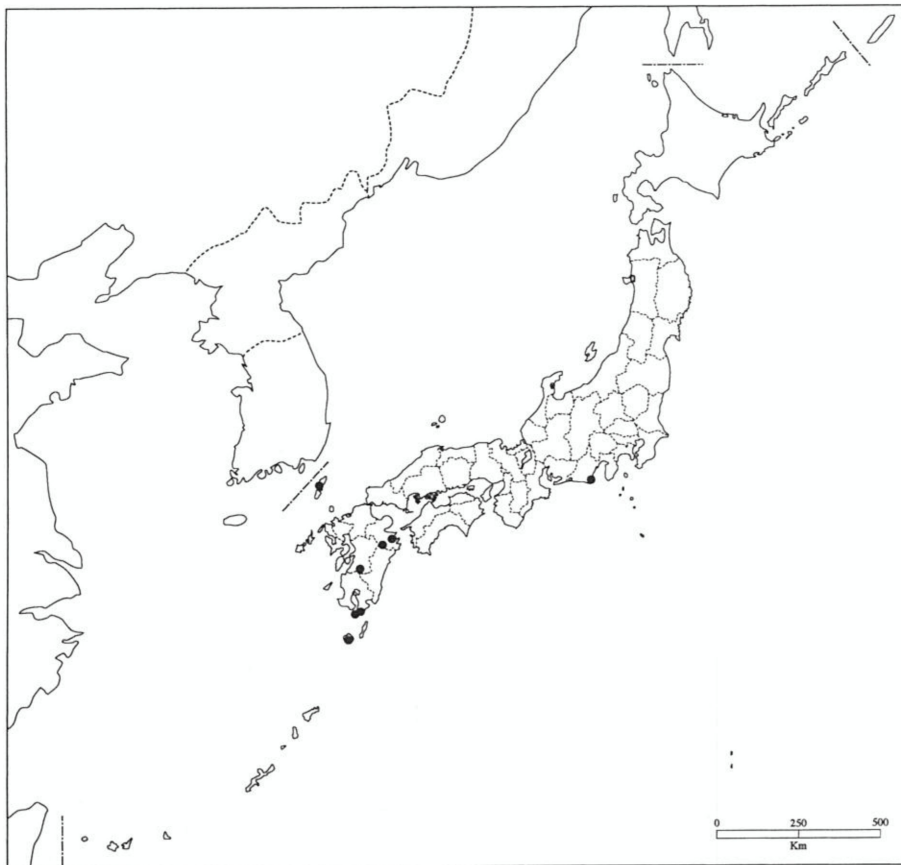


Fig. 8. Distribution of *Eterozemus celtis*.

試みたところ、辺材と心材の中間に位置する灰褐色の部分から複数の死骸と共に成虫と幼虫を採集することができた (Fig. 7)。その際、蛹室が材表面に対して平行に形成されているのが観察された。また、*E. celtis* を採集中、本種の蛹室と隣り合ったところからヒメマルミツギリゾウムシ *Higonius cilo* LEWIS の成虫2個体が得られた他、同材からはヒトオビアラゲカミキリ *Rhopaloscelis unifasciatus* BLESSIG など様々な材穿孔性甲虫が見出されたが、それらの甲虫類の坑道と *E. celtis* との関係特定することはできなかった。

対馬での採集例は、夏季、雑木林に囲まれた公園に設置したライトトラップに飛来したものである。また、屋久島では夜間にスタジイ *Castanopsis cuspidata* (THUNBERG) SCHOTTKY var. *sieboldii* (MAKINO) NAKAI 立ち枯れ上で得られたという (松本慶一, 私信)。

分布。 *Eterozemus celtis* の地理的分布を Fig. 8 に示す。本研究では、伊豆や九州本土以外にも、従来記録のなかった対馬および屋久島における本種の分布が初めて確認された。なお、LEWIS (1884) は、球磨川河川敷において12個体ほどの成虫を得た後、“....., solitary examples were obtained in various places in Higo.” と記しているが、この記録に関しては正確な産地が一切不明なためプロットしていない。

考 察

生態。 *Eterozemus celtis* の記載時に、LEWIS (1884) は本種が材穿孔者に関連した生態を持つことを示唆している。今回、多数の成虫が *C. fulgidissima* 幼虫の食痕に沿って形成された蛹室から見出されたことによって、本種が他の甲虫類の穿孔内を産卵場所として利用することが確認された。本種のこの習性は ZIMMERMAN (1994) がオーストラリア産ミツギリゾウムシ類の生態に認めた基本4型：1) 枯死材穿孔性 (多くの分類群)；2) 生体組織穿孔性 (*Cylas*)；3) 坑道内潜入性 (*Cyphagogus* とその近縁属)；4) 好蟻性 (*Eremoxenini*) の内の3) に当たる。

Chrysochroa fulgidissima は寄主範囲がかなり広く、エノキの他にケヤキ *Zelkova serrata* (THUNBERG)

MAKINO およびサクラ類, カシ類などの枯木を利用する他, モミ *Abies firma* SIEBOLD et ZUCCARINI やカキ *Diospyros kaki* THUNBERG などについて記録もある(黒澤, 1985)。もし, *E. celtis* が *C. fulgidissima* 幼虫の坑道を利用するのであれば, 当然これらの樹種からも本種が発見されるはずである。また, 成虫がヒョウホンムシ類かナガキクイムシ類の穿った小孔に出入りしていたという LEWIS (1884) の観察例や, 明らかに *C. fulgidissima* の寄主植物ではないアカメガシワの枯木から成虫と幼虫が得られた事実は, 本種がその幼虫以外の材穿孔者の坑道をも利用することを示唆している。さらに, 屋久島においてスダジイの枯木から成虫が得られたということも考慮に入れると, 本種が利用できる植物の範囲は比較的広いものと推測される。

LEWIS (1884) は「*E. celtis* は材穿孔者の坑道を利用するが, *Cyphagogus* とは(形態学的・行動学的に)その奇抜さの程度が異なる」と述べている。*Eterozemus* と同族である *Cyphagogus* とその近縁属の成虫はまだ実際に活用されている坑道を利用して, 内部で遭遇したクイムシ類やナガキクイムシ類(少なくとも入り口を塞ぐ guardian male) を大あごを用いて強制的に排除するという(BEESON, 1925; BROWNE, 1961)。我々の観察によると, *E. celtis* は *C. fulgidissima* が羽化脱出した後の古い坑道を単に利用しているだけであり, 「正当な占有者」(BEESON, 1925) を排して坑道を占拠するというものではなかった。また, 上述の通り, 本種はある特定の材穿孔者の坑道のみを選好するというわけではなく, その寄主範囲もある程度広いことが予想される。したがって, 本種の持つ習性は, もし両者の既知の習性が固定的なものであるならば, *Cyphagogus* 他数属のそれとは「住居を強奪」するか「空き巣を利用」するかという点および寄主坑道に対する特異性という点において明らかに異質であると言える。ただし, 現時点では, *Cyphagogus* 他近縁数属がアンブロシア甲虫類の坑道に特異的に適応した絶対的(obligate)な坑道内寄生者であると断言することはできない上, *E. celtis* が随意的(facultative)な坑道内寄生者である可能性も否定できない。今後, *Cyphagogini* における形態的特殊化の程度と生態的特殊化の程度との関連性を探るためには, 選好性実験など, *E. celtis* や *Cyphagogus* 等の生態に関するさらに詳細な調査が望まれる。また, 現在生活史が不明な *Eterozemus* 属の他種や大多数の属の生態情報を蓄積して行くことが肝要であろう。

分布. 既知の分布状況から推測すると, 現在空白地となっている福岡, 長崎(対馬を除く), 宮崎各県にも *E. celtis* が生息することはまず間違いない。また, 静岡県南部や大隅半島南部, 屋久島における分布やその寄主範囲などを考慮に入れると, 将来的に伊豆諸島, 東海, 南紀, 土佐などの太平洋岸の温暖な地域, あるいは屋久島以外の南西諸島からも本種が発見される可能性が高いと思われる。本種はさらに広い分布域を持っているかも知れず, 今後各地における調査が必要である。

謝 辞

ミツギリゾウムシ類の生態に関して種々ご教示下さり, 草稿のご校閲を賜った森本 桂先生(福岡市)および貴重な標本を恵み下さった松本慶一氏(八王子市), 2003年2月の採集にご同行いただいた関 章弘氏(大分市)に厚くお礼申し上げます。また, 発表の機会を与えて下さった本誌編集者の鈴木 互・川島逸郎両氏に記して感謝の意を表したい。

摘 要

エノキミツギリゾウムシ *Eterozemus celtis* (LEWIS) の生態と分布について報告した。大分県において, タマムシ *Chrysochroa fulgidissima* (SCHÖNHERR) 幼虫に食害されたエノキの切り株より多数の本種成虫が得られた。各個体が *C. fulgidissima* の坑道に沿って形成された蛹室内から発見されたことから, 本種も同族のホソミツギリゾウムシ属 *Cyphagogus* PARRY やその近縁属と同様に材穿孔性甲虫に関連した生態を持つことが確認された。しかし, 本種が利用していたのはすでに *C. fulgidissima* が羽化脱出した後の坑道であり, 坑道形成者を排して占拠するという *Cyphagogus* などの既知の習性とは明かな相違が認められた。アカメガシワ *Mallotus japonicus* (THUNBERG) MUELLER (ARGOVIENSIS) やスダジイ *Castanopsis cuspidata* (THUNBERG) SCHOTTKY var. *sieboldii* (MAKINO) NAKAI から採集されていることから, 本種は比較的広い寄主範囲を有し, 不特定多数の材穿孔性昆虫の坑道を利用するものと考えられた。本種が随意的に坑道内寄生者となり得るのかどうかさらなる研究が必要である。また, 本研究において, これまでに記録されていた静岡県南部や九州本土以外に対馬と屋久島における本種の分布が確認された。既知の分布状況から, 九州の未記録地だけでなく, 本州および四国などの太平洋岸の温暖な地域や南西諸島にも本種が分布する可能性が高いと推測した。

Summary

The genus *Cyphagogus* PARRY and some other genera of the tribe Cyphagogini, the subfamily Cyphagoginae possess highly modified bodies involved with the habit of 'nest parasitism', usurping nests of scolytid and platypodid ambrosia beetles to acquire breeding sites. Cyphagogini is presently composed of 69 genera. They differ in the degrees of structural modification of various body parts. Biology has never been cleared in the majority of the genera until now, though the morphological

difference strongly suggests that they differ also in ecological traits. *Eterozemus celtis* (LEWIS) is one of the cyphagogine weevils with less modified body. In Kyushu, West Japan, a large number of *E. celtis* adults were obtained from the inside of an old stump of *Celtis sinensis* PERSOON, which was infested by larvae of *Chrysochroa fulgidissima* (SCHÖNHERR) (Buprestidae). Each individual formed its pupal cell along a used tunnel of *C. fulgidissima* larva. Therefore, *E. celtis* was considered to utilize, for oviposition, larval tunnels of the buprestid with no usurpation. This habit of *E. celtis* differs from the known habits of *Cyphagogus* and allied genera in the same tribe. *Eterozemus celtis* adults and larvae were found also from the inside of a dead wood of *Mallotus japonicus* (THUNBERG) MUELLER (ARGOVIENSIS), which was heavily infested by cerambycids and other wood-borers. Moreover, two adults were taken on a dead wood of *Castanopsis cuspidata* (THUNBERG) SCHOTTKY var. *sieboldii* (MAKINO) NAKAI. This species may feed on a variety of plant species and deposit its eggs in tunnels made by unspecific wood-borers. Further studies are needed to examine whether or not *E. celtis* lives also in active nests of wood-boring Coleoptera and ejects the original owners of the nests. We also provided the geographical distribution of *E. celtis*, based on previous records and specimens examined.

引用文献

- ALONSO-ZARAZAGA, M. A. & C. H. C. LYAL, 1999. A World Catalogue of Families and Genera of Curculionoidea (Insecta: Coleoptera) (Excepting Scolytidae and Platypodidae). 315 pp. Entomopraxis, Barcelona.
- BEESON, C. F. C., 1925. On some Indian Brentidae (Coleoptera). Part II. Notes on the biology of the Brentidae. *Ind. For. Rec.*, 11(4): 171-188 [1-18], pl. III.
- BROWN, F. G., 1961. The Biology of Malayan Scolytidae and Platypodidae. Malayan Forest Records No. 22. xi+255 pp., 9 pls. Federation of Malaya.
- DAMOISEAU, R., 1979. Contribution a la systematique et corrections a la nomenclature des Calodrominae (Coleoptera: Brentidae) I. —Tribu des Calodromini. *Bull. Inst. r. Sci. nat. Belg.* 51(3): 1-39.
- KLEINE, R., 1938. Coleoptera, Fam. Brentidae. In WYTSMAN, P. (ed.), *Genera Insectorum*, (207): 1-197, 6 pls. P. Wytzman, Bruxelles.
- 黒澤良彦, 1985. タマムシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著, 原色日本甲虫図鑑, 3: 2-37, pls. 1-7. 保育社.
- LEWIS, G., 1884. On Japan Brentidae, and notes of their habits. *J. Linn. Soc. Zool.*, 17: 295-302, pl. XII.
- MORIMOTO, K., 1962. Key to families, subfamilies, tribes and genera of the superfamily Curculionoidea of Japan excluding Scolytidae, Platypodidae and Cossoninae (Comparative morphology, phylogeny and systematics of the superfamily Curculionoidea of Japan. III). *J. Fac. Agr., Kyushu Univ.*, 12: 21-66.
- MORIMOTO, K., 1976a. On the Japanese species of the family Brentidae (Coleoptera). *Kontyû*, 44: 267-282.
- MORIMOTO, K., 1976b. Notes on the family characters of Apionidae and Brentidae (Coleoptera), with key to the related families. *Kontyû*, 44: 469-476.
- 森本 桂, 1979. 日本産ミツギリゾウムシ科概説(1). 甲虫ニュース, (46): 1-6.
- 森本 桂, 1989. ゾウムシ科. 平嶋義宏監修, 日本産昆虫総目録: 498-525. 九州大学農学部昆虫学教室.
- 杉本可能, 2000. 静岡県下のミツギリゾウムシ科甲虫の記録. 甲虫ニュース, (131): 15.
- ZIMMERMAN, E. C., 1994. Brentidae, Eurhynchidae, Apionidae and a chapter on Immature Stages by Brenda May. Australian Weevils (Coleoptera: Curculionoidea), 2. x+755 pp. CSIRO, Australia.

(吉武: 九州大学; 堤内: 大分県臼杵市)

○ホソカミキリモドキ沖縄本島の記録

ホソカミキリモドキ *Dryopomera* (s. str.) *yatoi* (NAKANE 1954) は本州, 四国, 九州, 屋久島, 奄美大島に分布している。一方, 石垣島, 西表島, 台湾には別種ヤエヤマホソカミキリモドキ *D. kurosai* が分布している。沖縄本島においては同属の記録がなく空白地帯であり, 著者は北部に *yatoi* 南部に *kurosai* が分布しているのではないかと推測していた。今回, 本会会員の露木繁雄氏によって同属の種が沖縄本島北部で採集されその標本の調査を著者に託された。各地の標本と比較検討したところ多少

色彩に差異があるものの外部形態は差異がなくホソカミキリモドキと判断した。沖縄本島初記録として報告する。

1♀, 国頭村尾西岳, 15. IV. 2002, 露木繁雄採集。

1♀, 国頭村伊江林道, 15. IV. 2002, 露木繁雄採集。

常緑照葉樹林のスイーピングで採集したとのこと。今後, 雄の採集が期待される。最後に標本を下さり調査の機会を与えて下さった露木繁雄氏にお礼を申し上げる。

(神奈川県横浜市, 秋山秀雄)

○和歌山県有田川河口及び紀ノ川河口からのアリヅカムシ 3 種の記録

筆者は和歌山県有田川河口付近 (図 1) 及び紀ノ川河口において、いずれも和歌山県初記録となるアリヅカムシ 3 種を採集したのでここに記録する。

Physomerinus pedator (SHARP) モモコブアリヅカムシ

4♂, 和歌山県有田市宮崎町有田川河口付近左岸, 28. V. 2002; 1♀, 同所, 22. X. 2002.

Prosthecarthron sauteri RAFFRAY アシベアリヅカムシ

1♂7♀, 和歌山県有田市宮崎町有田川河口付近左岸, 28. V. 2002; 3♂5♀, 同所, 22. X. 2002.

Triomicrus simplex SHARP ツヤマルムネアリヅカムシ (図 2)

6♂7♀, 和歌山県有田市宮崎町有田川河口付近左岸, 28. V. 2002; 1♂9♀, 同所, 22. X. 2002; 3♂10♀, 和歌山県和歌山市有本紀ノ川河口付近左岸, 10. X. 2002; 3♂4♀, 同所, 24. X. 2002.

採集者はすべて河上康子, 標本は野村周平博士により同定され, 国立科学博物館に収蔵されている。3 種のうち, モモコブアリヅカムシについては新井 (2002) により既知産地が纏められ, アシベアリヅカムシは NOMURA (1998) により千葉, 広島, 香川, 佐賀, 大分, 宮崎から, 新井 (2002) により神奈川の各県から記録されている。

今回の採集環境はいずれも, 河口付近のヨシ原地表であるが, アシベアリヅカムシは干潮時のみ現れる干潟から, 他の 2 種は満潮時の汀線と思われる位置からやや高い場所にかけて確認された。野村博士によると, 3 種はいずれも河口ヨシ原付近に特異的に生息する種であり, 最も水際の地表にアシベアリヅカムシ, 満潮でも水の来ないヨシ原リター中にツヤマルムネアリヅカムシ, さらに陸に近いススキ類リター中にモモコブアリヅカムシと, 高さにより棲み分けているとのことである。

報告にあたり, 資料同定の労とご教示を頂き, 記録の公表を勧めて頂いた野村周平博士に厚く御礼申



図 2. ツヤマルムネアリヅカムシ

しあげる。

引用文献

- 新井志保, 2002. モモコブアリヅカムシの採集例とその棲息場所. 甲虫ニュース, (138): 19-20.
 新井志保, 2002. 多摩川河口付近で採集されたアシベアリヅカムシ. 神奈川虫報, (138): 64.
 NOMURA, S., 1998. Records of a Brachyglutine species, *Barbiera parpalis* (LÖBL) (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae) from Japan, with notes on its habitat. *Elytra, Tokyo*, 26: 129-130.

(大阪府高槻市, 河上康子)

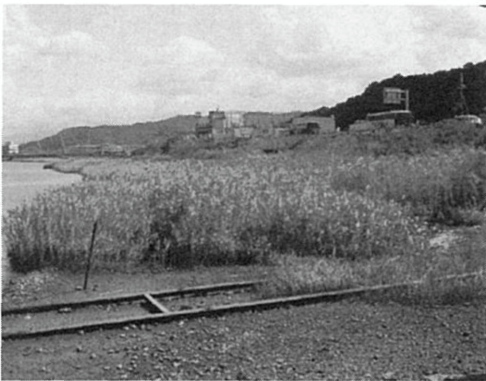


図 1. 採集環境 (有田川河口付近)

◇「甲虫ニュース」原稿募集◇

日本鞘翅学会では, 甲虫ニュースの原稿を広く募集しています。甲虫に関するものであれば, 分布, 生態, 行動, 形態, 生理など何でもかまいません。ワープロ等で作成される場合は, 1 行 23 字にそろえ, FD とプリントアウトした原稿を 1 部つけて下記宛にご投稿ください。

〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-14-13

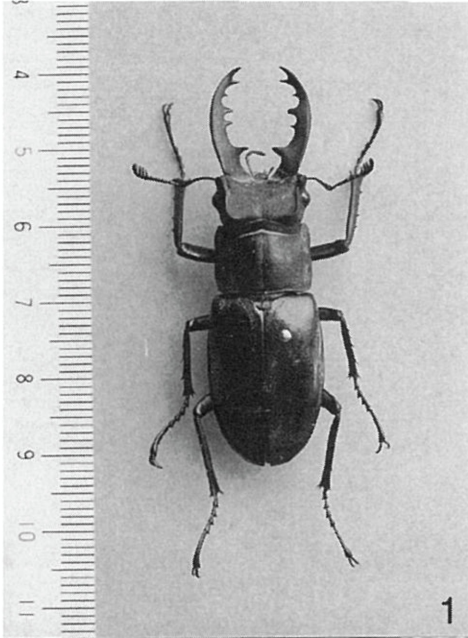
鈴木 互宛

附図がない場合には E-mail で, 原稿を添付ファイル (一太郎かワード) として送って頂いてもかまいません。elater@sp.catv.ne.jp

多くの方々からの原稿をお待ちしています。

○北海道胆振管内からミヤマクワガタ♂基本型を記録

黒澤(1985), 岡島・山口(1988)は、北海道におけるミヤマクワガタ *Lucanus maculifemoratus* MOTSCHULSKY ♂ 基本型の分布を南端部のみとしているが、筆者は南端部よりはるかに北方に位置する胆振管内から同種基本型を2例記録しているので報告する。



1. 1♂(基本型), 北海道虻田郡洞爺村川東(国土地理院標準地域メッシュ No. 6340-76-79), 29. VI. 2002 (写真1).

2. 1♂(基本型), 北海道苫小牧市樽前(6341-73-37), 2. VIII. 2002 (写真2).

2例とも灯火に飛来していた個体を採集していたものであるが、いずれも大腮の第一内歯が長い点が北海道では♂の殆どを占めるエゾミヤマ型と異なっている。特に2例目の苫小牧市産の個体はより大型であるため、この特徴が顕著になっている。

なお、2例目の1♂は、同年10月8日に斃死するまでの間、筆者が飼育していた。

参考文献

- 黒澤良彦, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II): 329-330. 保育社.
水沼哲郎・永井信二, 1994. 世界のクワガタムシ大図鑑: 214-215. むし社.
岡島秀治・山口 進, 1988. クワガタムシ: 71-74. 保育社.
吉田賢治, 1996. カラー図鑑 クワガタムシ・カブトムシ: 60-62, 90. 成美堂出版.

(北海道室蘭市, 山川雄大)

○エゾヒメゲンゴロウの水中での行動

森・北山(1993)はハイイロゲンゴロウ *Eretes sticticus* (LINNÉ) が水中で前翅を開く習性があることを報告しているが、それ以外のゲンゴロウ類ではこれと同様な習性を持つ種類があるという報告はなかった。

筆者は、2002年9月22日15時20分頃、北海道勇払郡穂別町長和の穂別川の川原にできた水溜まりで、エゾヒメゲンゴロウ *Rhantus yessoensis* (SHARP) *lex* が、水底の石にしがみつきながら約10秒間、体を震わせ水中で前翅を開く動作を観察することができたので報告する。なお、この個体は行動を観察していた筆者の気配に気づいてか、その後、前翅を閉じて静止した。

エゾヒメゲンゴロウが棲息していた水溜まりは穂別川の分流が渇水で取り残されることで形成され、礫で構成された川原(河川Bb域)の一角にポツと存在する形となっており、水温は13.8℃(同日15時35分)とかなり低かった。

参考文献

- 森 正人・北山 昭, 1993. 図説・日本のゲンゴロウ: 128-129. 文一総合出版.

(北海道室蘭市, 山川雄大)

渡嘉敷島および伊平屋島に産する *Stenocladius* 属の知見 (予報)

佐藤文保・川島逸郎

Preliminary report of the genus *Stenocladius* (Coleoptera, Lampyridae) from Tokashiki-jima Is. and Iheya-jima Is., Okinawa Isls., Southwest Japan

Fumiyasu SATO and Itsuro KAWASHIMA

日本に産するフサヒゲボタル属 Genus *Stenocladius* は、奄美諸島以南の琉球列島から少なくとも4種以上が確認されているが(大場・後藤・川島, 1996; KAWASHIMA, 1999), 小さな島嶼を中心として, 分類学的な処置については今後更なる詳細な調査・検討を要する個体群が存在する(大場・後藤・川島, 1996b). この属は, 現時点ではミナミボタル属 Genus *Drilaster* とともにミナミボタル亜科 Subfamily Otoretinae 中の一群とされているが, 幼虫期に加えて, 成虫の外部形態においても大きな格差が認められる. 特に日本産の種において初めて確認されたように(大場・後藤・川島, 1997), 本属の雌成虫はほぼ完全な幼虫形を呈することで決定的に異なっている. ちなみに, 八重山諸島に分布するオオメボタル科 Family Rhagophthalmidae イリオモテボタル *Rhagophthalmus ohbai* WITTMER, 1994 の雌成虫もやはり幼虫形であるが, 触角節数の増加や, 不完全ながらも複眼を形成すること, 脚は附爪節でなく完全な附節および2本の爪をそなえることで, 本属の雌成虫に比べればはるかに“成虫的”である(大場・後藤・川島, 1996a). 近年飛躍的に発達した分子系統学的解析結果においても, 本属とミナミボタル属は, 同一のクラスターを形成しないことが明らかにされている(SUZUKI, 1997). 今回の報告では, 分類学的な処置が確定するに至っていない個体群のなかでも, 比較的情報が多く集積された, 渡嘉敷島および伊平屋島に各々分布する個体群について報告する. なお, 和名については“フサヒゲボタル”とされることが多いが, 生時の雄成虫を見る限り, “房”状とするには適当でないので, 近い将来に投稿を予定している日本産ホタル類のチェックリスト上(川島逸郎・鈴木浩文・佐藤正孝作成による)において, 簡略化して単に“ヒゲ”ボタルと改称する予定であることを付記しておく.

生息環境

渡嘉敷島: 大谷林道および渡嘉敷川源流から上流にかけて中心に調査を行った. 大谷林道においては主としてリュウキュウマツ林の林床, 渡嘉敷川では主としてオキナワジイ林の林床で, 下草に雄成虫が静止しているのが確認された. 植生の詳細については今回記載を省略して後に譲りたい. なお, 同じ慶良間諸島に属する座間味島においても同様の植生がみられるが, 1996年に筆者の一人川島が調査に赴いた折には, 乾燥が顕著で幼虫さえも発見できなかった. ただし, その他の近隣の島々とともに本属の個体群が生息する可能性は大きいので, 今後追加調査を実施する予定である. ここでは, 渡嘉敷川源流において雄成虫が発見された環境写真の1例を示す(Fig. 1).

伊平屋島: 島のほぼ中央, 西海岸寄りにある腰岳(こしだけ)を中心として調査を行った. 腰岳林道においては, 比較的安定した森林のギャップおよび山道脇の下草に静止する雄成虫が多数確認された. 植生の詳細については今回記載しないが, 標高の高い場所では主にオキナワジイ林, 山麓ではリュウキュウマツ林に多く, いずれも林床にあまり下草が発達しない開放的な環境に多い. 上空の開けたギャップ, 林縁部でも多く発見される. 同様の環境は島のほぼ全域に存在するので, 樹林域では普遍的に分布する可能性が大きい. 腰岳において雄成虫が多く発見された環境写真の1例を示す(Fig. 2).

幼虫期の形態および色彩斑紋

渡嘉敷島および伊平屋島に分布する各々の個体群においては, 幼虫期における外部形態は, これまでに詳しく調査されている沖縄島に分布するタテオビフサヒゲボタル *S. azumai* NAKANE, 1981 および八重山諸島石垣島・西表島に分布するキベリフサヒゲボタル *S. shirakii* NAKANE, 1981 (大場・後藤・川島, 1996b) とほとんど差異がなく, 形態上での明確な区別は不可能である. ただし, 上記の報文で記載されたように, 胸部・腹部背板の斑紋パターンは種(または個体群)ごとに固有で, 差異は非常に明瞭であるために, それぞれ互いに区別することが容易に可能である. 以下に胸部および, それ以降連続する腹部背板の色彩斑紋パターンを記載する.

渡嘉敷島産個体群: 地色は鮮やかな赤色で, 若齢では淡い橙色. 黒色斑は, 前胸背板ではほとんど消失するが, 中胸以降の各背板前縁に沿って発達する. その幅は両側方へ向かうに従い幅広くなり, 中央でもっとも狭



Fig. 1. Micro-habitat of *Stenocladius* sp. in Tokashiki-jima Is., Kerama group.

Fig. 2. Micro-habitat of *Stenocladius* sp. in Iheya-jima Is.

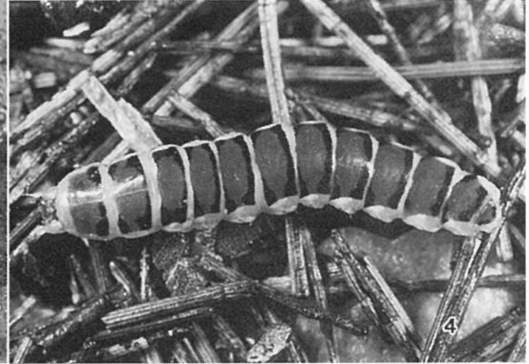
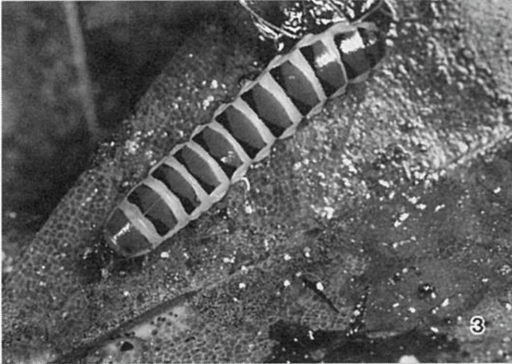


Fig. 3. Larva of *Stenocladius* sp. from Tokashiki-jima Is., Kerama group.

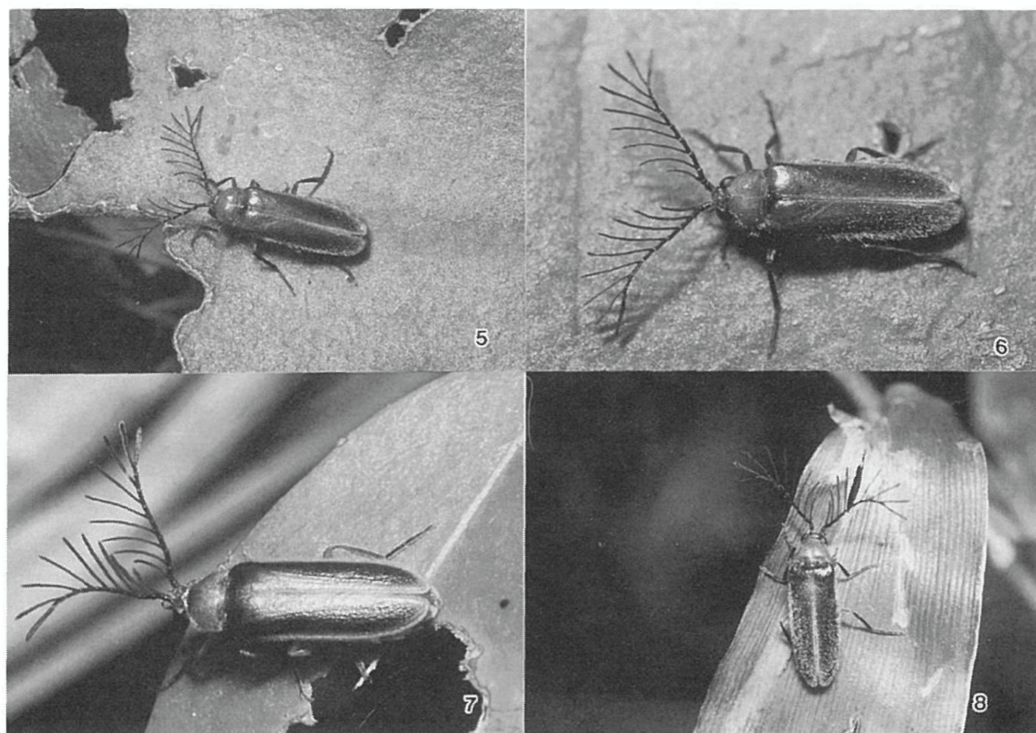
Fig. 4. Larva of *Stenocladius* sp. from Iheya-jima Is.

まるが、黒色斑が左右側方に大きく分離する沖縄島産のタテオビフサヒゲボタルとは異なり、中央で接するまで延長するか、もしくはかすかに分離するにすぎない (Fig. 3)。

伊平屋島産個体群：地色は鮮やかな赤色で、若齢では淡い橙色。黒色斑は、前胸では両後角にのみ残存する。中胸以降では両前角に生じ、いずれも内側へ向かうに従い狭まる。後縁はすべての節の背板において黒色斑で縁どられ、外側へ向かうに従いその幅は拡がり、個体によっては前角の黒色斑と左右縁部で繋がる (Fig. 4)。

雄成虫の形態および色彩斑紋

今回この報文において記載する成虫はいずれも雄のみで、いずれの個体群もまだ雌成虫の研究材料は得られておらず、その外部形態は判明していない。しかし、野外で発見されるのは雄個体のみに限られることから考えると、これまで他種で詳しく調査され判明しているように (大場・後藤・川島, 1997)、ほぼ完全な幼虫形であり、落葉下や土壌の間隙に潜んでいるために、容易に発見できないことはまず間違いないと考えられる。この点に関しては、今後継続して調査を行う予定であるので、結果については後に譲りたい。ここでは雄個体の



Figs. 5-6. Adult male of *Stenocladius* sp. from Tokashiki-jima Is., Kerama group.

Figs. 7-8. Adult male of *Stenocladius* sp. from Iheya-jima Is.

ごく大まかな外形や色彩について、以下に簡潔に記載しておくにとどめておく。

渡嘉敷島産個体群：体形および色彩は沖縄島産タテオビフサヒゲボタルにもっともよく類似する。触角における分枝の相対長は、タテオビフサヒゲボタルおよび八重山産キベリフサヒゲボタルとほぼ同じで、明確な区別はできない。触角はほぼ黒色。脚は腿節が幾分褐色味をおびるが、それ以外はほぼ全体が濃褐色。頭蓋は濃褐色。前胸背板は黄褐色。上翅は濃褐色で、会合縁を含めた周縁は黄褐色味をおび、小楯板周辺も広く黄褐色をおびることが多い。小楯板は濃褐色。

伊平屋島産個体群：体形および色彩は沖縄島産タテオビフサヒゲボタルにもっともよく類似する。触角における分枝の相対長は、タテオビフサヒゲボタルおよび八重山産キベリフサヒゲボタルとほぼ同じで、明確な区別はできない。触角はほぼ黒色。脚は腿節が幾分褐色味をおびるが、それ以外はほぼ全体が濃褐色。頭蓋は濃褐色。前胸背板は黄褐色で、個体によっては前縁が褐色味をおびる。上翅は濃褐色で、会合縁を含めた周縁は広く黄褐色をおびる。小楯板は濃褐色。

分類学的な処置について

現在、成虫期および幼虫期において、乾燥および液浸標本といった研究材料を集積中であるために、この時点での分類学的な処置を行うことは控えるが、できる限り早期に、十分な材料を蓄積して慎重に検討を行いたいと考えている。本属の雄成虫は柔軟なホタル科の中でもとりわけ外皮のスクレロチン化が脆弱で、色彩の個体変異も非常に大きい。八重山に分布するキベリフサヒゲボタルでは、体全体が完全に黄色の個体から、上翅がほぼ完全に黒色となる個体まで出現し、なおかつ黄色味の強い個体であっても、短時間の間に黒色味を増すことが確認されている。逆に、乾燥標本では年を経ることの褪色が早く、もちろん保存状態にも左右されるものの、黒色の個体であっても比較的短期間のうちに黄色化が進行してしまう。雄交尾器も非常に小形で、乾燥による変形がきわめて著しいうえに、形態に関してもかなりの個体変異が認められる。今回取り上げた2個体群においても、雄成虫の色彩のみをみると非常に沖縄島産のものに類似する一方で、幼虫の斑紋パターンにおいてはかなり明確な差異が認められる。そのような現象を踏まえて、今後の仕事として然るべき、衆目にもより納得され得る最適な処置および記載を行う予定である。なお、分子系統学的な解析については、現在、鈴木浩文博士によって検討中でもあることから、分子情報をも踏まえた結果を公表できると予想している。

謝 辞

本報文を作成するに当たって、日頃から様々な面において大きなご助力と、多くの貴重なご助言を下さっている佐藤正孝博士 (名古屋女子大学大学院)・鈴木浩文博士 (東京都立大学自然科学講座)・後藤好正氏 (神奈川県立大師高等学校) の各位に、深く感謝の意を表します。

引用文献

- KAWASHIMA, I., 1999. The lampyrid beetles of the genus *Stenocladius* (Coleoptera, Lampyridae) of the Ryukyu Islands, Southwest Japan, with descriptions of two new species. *Elytra, Tokyo*, 27: 141-158.
- NAKANE, T., 1981. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXXIII. *Fragm. Coleopt., Kagoshima*, (29/32): 125-130.
- 中根猛彦, 1998. 日本のクシヒゲボタル属 *Stenocladius* について. 昆虫と自然, 32(8): 33-36.
- 大場信義・後藤好正・川島逸郎, 1996a. イリオモテボタルの外部形態・習性および生息環境. 横須賀市博研報 (自然), (44): 1-19.
- 大場信義・後藤好正・川島逸郎, 1996b. クシヒゲボタル属幼虫の外部形態・色彩斑紋パターンおよび習性. 横須賀市博研報 (自然), (44): 21-31.
- 大場信義・後藤好正・川島逸郎, 1997. 日本産クシヒゲボタル属の行動および雌成虫形態. 横須賀市博研報 (自然), (45): 23-37.
- SUZUKI, H., Molecular phylogenetic studies of Japanese fireflies and their mating systems. *Tokyo Met. Univ. Bull. nat. Hist.*, (3): 1-53.

(佐藤: 久米島町立久米島ホテル館)
(川島: 神奈川県横須賀市)

○ホソヒメクロコメツキの長野県からの記録

ホソヒメクロコメツキ *Ampedus otobei* は、三重県宮川村父ヶ谷において採集された 1♂1♀を基に KISHII (1986) によって記載された体長 6 mm 内外の黒色をした種である。少ない種のように原記載以降、本種の採集された記録はない。筆者は新産地である長野県において採集された本種を検したのでここに報告しておく。

1♂, 長野県木曾郡王滝村御嶽山, 26. VI. 1981, 湯沢宣久採集。

末筆ながら貴重な標本を恵与された名古屋市の湯沢宣久氏にお礼申し上げる。

引用文献

- KISHII, T., 1999. A check-list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (42): 1-144.

(大阪市住吉区, 有本久之)

○東京都におけるスナサビキコリの採集例

スナサビキコリ *Meristhus niponensis* LEWIS, 1894 は、本州、四国、九州の海浜に広く分布する種としてよく知られているが、関東地方における記録は極めて少ない。筆者は、東京都の埋め立て地で採集された本種の個体を検することができたので、ここに記録しておきたい。

1ex., 東京都江戸川区葛西臨海公園, 30.VII.2002, 川田一之採集。

採集された場所が埋め立てられた場所であることから、持ち込まれた砂や植物とともに入ったのか、埋め立て後に周りから入ったものなのかわからないが、この記録により、千葉県や神奈川県海浜地域

にも生息している可能性がでてきた。また、本種はこれまでに伊豆諸島からの報告はないが、大島や神津島など本州に隣接している島には生息している可能性も高い。これらの地域を調査をされる際には注意していただきたい。

短報を書くに当たり、標本をご恵与くださった川崎市の川田一之氏にお礼申し上げる。

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○静岡県初記録の甲虫類 2 種

天城山系にて静岡県初記録の甲虫類を採集したので報告する。

1. ヒラテナガクチキ *Stolius diversipes* (Pic)

3 頭, 静岡県中伊豆町遠笠山, 29. IV. 2002; 1 頭, 静岡県中伊豆町四辻, 12. V. 2002; 1 頭, 静岡県中伊豆町遠笠山, 12. X. 2002; 1 頭, 静岡県中伊豆町四辻, 12. X. 2002. 全て筆者採集。

林内の密生した枯れ枝や枯れづるから採集した。近似種ヨツボンキバネナガクチキ *Stolius vagepicus* LEWIS のように上翅の斑紋が明瞭な個体も含むが、♂の前脚跗節のへら状の拡がり顕著であることから本種と判断した。

2. ルリナガクチキ *Melandrya shimoyamai* HAYASHI

1 頭, 静岡県中伊豆町遠笠山, 2. VI. 2002, 筆者採集。

16:00 頃, 林内の広葉樹立ち枯れ上を徘徊していた。

いずれの採集地もアセビ, リョウブ, タンナサワフタギの多い自然林である。

(東京都足立区, 木元達之助)

イリオモテマドボタルという種について・追記

川島 逸郎

筆者は、前報(川島, 2002)で日本産ホタル科における疑問種のひとつ、八重山諸島西表島から記載されたイリオモテマドボタルのホロタイプにおける、ラベルを含む写真および簡単な外部形態と、それにまつわる情報を提示し、諸情報の提供を期待した。

それが活字となって印刷されしばらくの後、福井県の長田 勝氏がお手紙を寄せてくださり、ラベルの採集者「K. Yasuda」というのは、同氏が琉球大学研究生であった頃からのご学友であり、現在は沖縄県農業試験場に勤務されている安田慶次氏ではないだろうか、との旨ご教示を頂いた。さらに安田氏にわざわざご連絡を取られて、ご本人から「あのホタルを採集したのは自分に間違いないと思う」と証言を得て下さった。安田氏からも沖縄から著者あてに神奈川県神奈川県の拙宅までお電話をいただいたが、丁度折悪しく筆者が久米島を含む沖縄諸島(!)へ調査に出かけていて、直接お話を伺うことができなかった。加えて恐縮なことには、久米島在住の佐藤文保氏にも電話連絡を入れて頂いており、ご本人の証言は、まずは久米島に到着直後に、佐藤氏からの伝言として聞く事ができた。さらに佐藤氏は年末年始も沖縄を廻られて、自ら聞き取り調査の役を担って頂いた。その内容の詳細を、安田氏の証言を中心に、著者を含めその他の方々の所見も交えつつ追記として以下に記述しておく。

採集者: 安田慶次・じゅんこ(漢字表記不明)

環境: 二次林のマント群落で、当時は現在のような森林環境ではなく、もっと開けた環境であったと記憶している。

目的: 琉球大学病理昆虫クラブによる琉大祭出展のため、西表島の自然林と二次林の昆虫相の相違を比較しようとした。

採集および調査法: ネットによるスウィーピングによるもの。戦後米軍によって実施されていた調査を参考に、西表島の白浜を調査地として選定し、自然林・二次林・畑地に分け、各々5m×5mのコドラートを設定、各区について上記の方法で昆虫を採集した。当時はより大型で、種名を同定しやすいと考えられるもののみを対象としたために、小型の昆虫の標本に関してはよく記憶していないが、ホタルの1♂が含まれていたことは覚えている。当該標本(後年イリオモテマドボタルのホロタイプとなったもの)はラベルの通りで間違いないと確信している。

ラベルについて: 標本は、当時琉球大学資料館(風樹館)におられた金城政勝氏の勧めですべてにラベルを付けた。川島(2002)で言及された、33"と書かれた不正形の紙片は、地点名を示している。この場合(イリオモテマドボタルのホロタイプ)は、白浜(現在の旧道・現在の白浜トンネルの山側)を指す。因みに、"は二次林、'は自然林、"は草原(もしくは畑地)のことである。よって、33"というのは西表島白浜(現在の旧道)の二次林を指すことを意味する。長田氏の指摘によれば、ラベルは筆者の予測どおり(川島, 2002)で、かつて琉球大学昆虫学教室では一括して、志賀昆虫普及社で販売されていたラベル印刷器を使用して作成していたの由である。筆者の知識では、この印刷器はインクの出具合や扱いの加減が比較的難しく、鮮明・整然と印刷することができるようになるまでには、慣れを必要としたことでよく知られているものである。

標本のその後の管理について: 標本は一括して琉球大学資料館に保管されていると考えていた。ましてや、故 中根猛彦博士のもとに渡り、新種として記載されているとは、今回の状況にいたるまで全く知らなかった。

管理保管場所および、如何なる経緯で当該標本が中根博士のもとに渡ったかに関しては不明な点が多いが、筆者自身が昨年末に、現在風樹館に勤務されている佐々木健志氏からお伺いしたところでは、「イリオモテマドボタルのホロタイプとなった標本は、風樹館に保管されていたものではないと思う」といったお話であった。その後、佐藤氏も佐々木氏との談話のなかで同様の帰結となったそうで、風樹館の保管でなく、東 清二教授が保管されていたものの可能性が大きいということである。ただし、東教授は「イリオモテマドボタル」との認識はなかったと思われるとのことであった。因みに佐藤氏が1999年に風樹館所蔵の両生爬虫類および昆虫標本の整理登録作業を担当した時、昆虫標本の保存状態はかなり悪かったとのことで、かつての標本は、データも含めて混乱してきた可能性は非常に高いことも念頭に置く必要が大きい旨を語られた。

以上のように今回、幸いにも多くの情報を得るに至ったが、その実在の証明という、当面の最大の問題が解決したわけではない。イリオモテマドボタルという種は、本当に八重山諸島西表島に存在する、あるいはかつては存在していたのだろうか? 今回ご助力を頂いたお一人、佐藤文保氏も長年にわたり昆虫・両生爬虫類を中心に、琉球列島の生物相を一貫継続して深く研究されているが、「今までに該当するホタルにまったく出会っ

KAWASHIMA, I., An additional notes on the lampyrid species, "*Pyrocoelia iriomotensis* NAKANE, 1985" (Coleoptera: Lampyridae: Lampyrinae).

ていないし、夏に出現するのであればなおの事、多くの昆虫採集者・研究者が訪れる八重山で、目立ちやすいホタルの種が採集されていないことに疑問を感じる」というコメントを寄せてくださった。問題解決に至らなかったとはいえ、多くの新しい情報が集まったというこの度の状況は、非常に幸福な事例といえよう。将来長きにわたって、更に多くの綿密な調査が必要となるが、今後とも様々な情報を頂くことができると期待を胸に結びとしたい。

最後に、本報文を作成するにあたって、多くのご援助をくださった以下の方々に、記して深くお礼を申し上げます。長田 勝氏 (福井市自然史博物館)・安田慶次氏 (沖縄県農業試験場病虫部害虫研究室)・佐藤文保氏 (久米島町立久米島ホタル館館長)・佐々木健志氏 (琉球大学資料館「風樹館」)。

引用文献

川島逸郎, 2002. イリオモテマドボタルという種について. 甲虫ニュース, (139): 7-9.

(神奈川県横須賀市)

○フトヒゲカミキリモドキの採集例

Hyperopselaphus ikedai フトヒゲカミキリモドキは Mizota (1999) により新属新種として記載された, 体長 10.6~11.6 mm と本邦産カミキリモドキ類の中では中型の種である。また, 和名の由来ともなっている小顎髯の形態は, 一見似通った種が多い中で他種との識別を容易にしている。本種のホロタイプは八重山諸島の黒島で得られたオス個体であり, 他に西表島と台湾南端の鵝鑾鼻岬のものがそれぞれタイプに指定されている。

原記載には生態面の知見として, 3月~4月の頃夜間の明かりに飛来したことが記されており, また溝田(1998)が「未記載種 2」として図示した種も本種のように, ここでは「沿海性で, 夜間灯火に飛来する」と記されている。

筆者は八重山諸島へ甲虫類の採集に幾度か訪れているが, その際に石垣島で本種を採集している。記

載されて間もないことから, 生態的なことなど様々な点で不明な部分が多いものと思われるので, この時の採集状況と共に報告しておく。

筆者が本種を採集したのは米原地区の海岸である。夜間, 海岸沿いに密生するアダンの茂みでゴミムシ類を採集していたところ, アダンの茎上を徘徊するたくさんのカミキリモドキが目についた。捕まえた個体を間近で見たところ, この虫の太く広がりを持つ小顎髯により, それまで採集したことのない種であることはすぐに判った。数頭を捕獲し, 良く見るとアダンの中でも枯れた茎の部分に, 特に集まっている事がわかった。同じ場所にゴミムシ類なども見られたことから, あるいは菌類等に誘引されていた可能性もあるが, キノコのようなものは特に目につかなかった。

翌日, 日中の明るい状態でアダンの茂みを見たところ, 火災によりこの場所のアダンはほとんどが枯れており, 夜間見られたような状況の枯れ茎もたくさんあることが確認できた。しかしながら, 昼間は本種の姿を全く確認できなかった。もしも火災による特異な状況下で個体数が多く発生したのであったとすると, 本来は採集しにくいものなのかもしれないが, その後同様の採集を行っていないのでわからない。採集データは以下のとおりである。

4 頭, 29. IV. 1999, 沖縄県石垣島米原, 筆者採集, 保管 (図)。

末筆ながら, 採集に同行頂き, また原記載を確認するために御尽力頂いた埼玉県日高市の新井志保氏に厚く御礼申しあげる。

引用文献

溝田浩二, 1998. かくれた人気甲虫 Part 2 (カミキリモドキ). 昆虫と自然, 33(11): 2-6.

MIZOTA, K., 1999. A new genus and species of Asclerini (Coleoptera: Oedemeridae) from the Yaeyama islands (Japan) and Taiwan. *Coleopt. Bull. USA*, 53: 287-292.

(埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

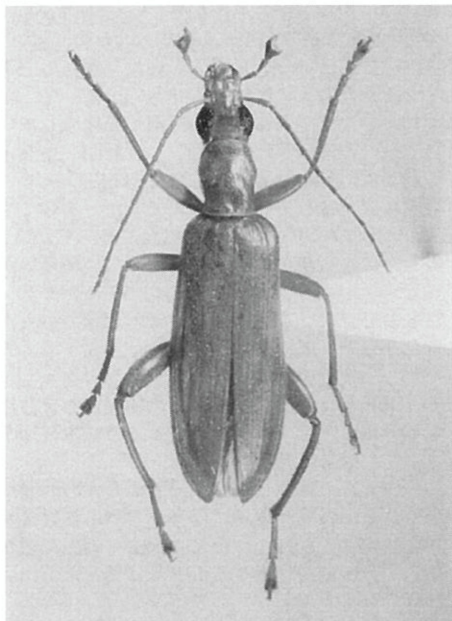


図. 石垣島で得られたフトヒゲカミキリモドキ

○訂正 「西表島におけるメダカハネカクシ 2 種の採集記録」

渡辺・江本 (2002), 甲虫ニュース, (138): 21-22. に次のような誤りがあったので訂正する.

- (誤) *Stenus (Stenus) piliferus* MOTSCHULSKY
 (正) *Stenus (Hypostenus) piliferus* MOTSCHULSKY
 (神奈川県藤沢市, 渡辺 崇)
 (東京都豊島区, 江本健一)

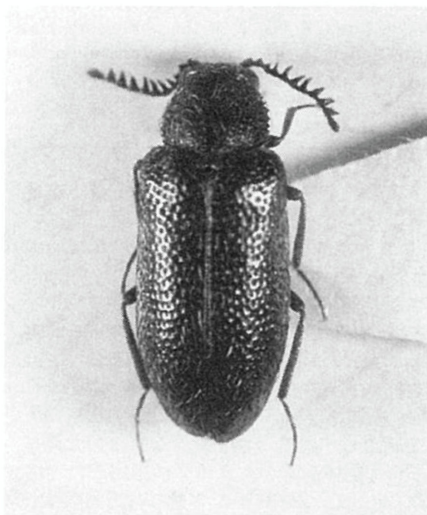
○ナガコケシジョウカイモドキの♂と思われるもの

ナガコケシジョウカイモドキ *Celsus elongatus* NAKANE は中根猛彦博士により島根県隠岐西の島の♀の標本で記載されたもので, パラタイプの奈良県春日, 富山県 Arimine, 福島県南会津産のものも♀である. その後の本種の記録は寡聞にして知らない.

筆者は♂と思われる標本を持っているので, ♀と共に報告する.

1♂, 群馬県上野村榎原ブドウ沢, 14. V. 2002, 八坂 允.

1♀, 山梨県奥多摩後山川, 3. V. 1982, 露木繁雄.



♀の触角は通常の糸状であるが, ♂は触角が顕著な櫛状になっている. 体型がやや細身のほかは特に違いはないようである.

両者は別々の場所で採集されているので, 必ずしも同種の雌雄とは限らない. 今後, 交尾したものを採集するとか, 同じ所で複数の♂♀個体が得られたという情報を期待したい.

末筆ではあるが, 標本を頂いた八坂 允, 露木繁雄氏に厚く御礼申し上げる.

参考文献

NAKANE, T., 1981. New or littel-known coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXIII. *Fragmenta*

Coleopterologica, (29/32): 125-130.

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

○アヤオビハナノミの灯火への飛来例

日本近隣のハナノミ科甲虫のうち, ヒメハナノミ族のものはオオメヒメハナノミやシズオカヒメハナノミを筆頭にしばしば灯火に飛来する一方, ハナノミ族のものはクリイロヒゲハナノミを除けば灯火での採集例はほとんどなく, とくにオビハナノミ属の種についてはまったく聞いたことがない. しかし筆者らの 1 人, 岸田はオビハナノミ属の大型種, アヤオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) ohgushii* (CHŪJŌ) を次のように灯火で採集しているのを報告する. 岸田自身は長年にわたり灯火採集を行っているが, 本属の種を灯火で得たのは今回が初めてである.

2 雌, 長崎県対馬上県町山田山, 10. VIII. 2002, 岸田採集・高桑保管.

夜 9 時半時頃に白布上に姿を見出したと記憶している.

(宝仙学園, 岸田泰則)

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

○チビジョウカイ亜科甲虫類数種の分布記録

チビジョウカイ亜科に属する甲虫類は, ジョウカイボン科の中でも小形のものが多く, 目に留まる機会の比較的少ないグループのようである. そのためか, 分布に関する記録も少ないと思われる. 筆者は記録が少ないか, これまで見られなかった地域で採集された下記 3 種の標本を検しているので記録しておきたい.

1. フタイロチビジョウカイ *Malthinellus bicolor* KIESENWETTER

これまで本州, 九州および韓国から知られていたが, 以下の標本を検することが出来た.

1♀, 香川県大川山, 29. VII. 2001, 藤本博文採集; 5♂, 愛媛県小田町小田深山, 14. VII. 1998, 松本吏樹郎採集; 1♂, 同所, 15. VII. 1998, 松本吏樹郎採集.

2. キアシツマキジョウカイ *Malthinus humeralis* KIESENWETTER

本種は本州および九州から記録されていたが, 以下の標本を検することが出来た.

2♀, 香川県大川山, 28. V. 1994, 渡辺昭彦採集; 1♂, 同所, 6. VII. 2002, 藤本博文採集; 2♀, 同所, 14. VII. 2002, 藤本博文採集; 3♂2♀, 愛媛県面河村面河溪, 19. VII. 1995, 筆者採集; 3♂2♀, 同所, 20. VII. 1995, 筆者採集; 1♀, 徳島県高越山, 10. VII. 1994, 渡辺昭彦採集.

3. クロスジツマキジョウカイ *Malthinus mucroreus* KIESENWETTER

これまで本州, 四国, 九州, 対馬, 五島列島など

から知られ、九州では比較的普通にみられるが、その他の地域では記録が少ないようである。

1♂1♀, 香川県仁尾町詫間越, 28. IV. 2001, 藤本博文採集; 2♂, 香川県多度津町佐柳島, 4. V. 2000, 藤本博文採集; 2♂, 香川県琴平山, 7. V. 2000, 藤本博文採集; 1♀, 香川県丸亀市本島町泊, 6. V. 2002, 藤本博文採集; 1♂, 長崎県壱岐島勝本町, 24. IV. 1999, 徐環李採集。

末筆ながら、標本の検討と発表を許された倉敷市立自然史博物館の奥島雄一博士、貴重な標本をご恵与いただいた久留米市の徐環李博士、丸亀市の藤本博文氏ならびに大阪市立自然史博物館の松本吏樹郎氏に厚くお礼申し上げます。

(九州大学, 高橋直樹)

○群馬県のアキタクロナガオサムシ

アキタクロナガオサムシ *Apotomopterus porrecticollis porrecticollis* (BATES) は秋田県から山口県までの主に日本海側の地域に多く分布する種で、関東地方では栃木県の平野部が数少ない産地のひとつとして知られている。隣接する群馬県においては、栃木県の足利市や田沼町に接した桐生市のみから記録があり、筆者らはこれまで同市梅田町、川内町で採集している。このほどさらに南下して渡良瀬川を越えた八王子丘陵において本種を確認することができたので報告する。この丘陵は渡良瀬川右岸に位置する独立丘陵であるが、約5万年前は渡良瀬川の流路が異なり足尾山地とつながっていたと見られている。トウホククロナガオサムシ、大形のベーツナガゴミムシ(あるいは近似の別種)など足尾山地南部に生息する歩行虫が飛び地的に分布しており、本種の発見も予想はされていたが今まで未確認であった。従来栃木県内においても渡良瀬川右岸での記録はなかったと思われる。

1♂3♀♀, 群馬県桐生市広沢町(八王子丘陵), 27. II. 2002; 2♂♂2♀♀, 同地, 2. III. 2002; 1♂3♀♀, 同地, 9. III. 2002, 金子採集; 2♂♂4♀♀, 同地, 2. III. 2002, 堀口徹採集; 2♂♂2♀♀, 同地, 9. III. 2002, 須田採集; 1♀, 同地, 9. III. 2002, 八坂允採集。

末文ながらともに調査をされ、データを提供してくださった堀口徹、八坂允の両氏、いろいろとご教示頂いた足利市の大川秀雄氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

黒沢良彦, 1988. アキタクロナガオサムシをめぐって. 甲虫ニュース, (81): 1-3.
群馬県林務部, 1990. 群馬県の貴重な自然, 動物編: 174-175.

(群馬県伊勢崎市, 須田 亨)

(群馬県渋川市, 金子順一郎)

○北海道におけるエノキコメツキダマシの記録

エノキコメツキダマシ *Dyscharachthis ampliocollis* (FLEUTIAUX, 1922) は1907年7月に東京で GALLOIS によって採集された多数の標本およびシンガポールで得られた1個体の標本に基づいて命名記載された種である。本種の国内での分布は、これまでに本州、四国、九州が知られていたが、北海道からの記録はなかった。筆者は、北海道で採集された個体を検する機会を得たのでここに記録しておきたい。

本種の属名は、これまで *Galloisius* が用いられてきたが、MUONA (1993: 49) の研究によって、*Galloisius* 属は *Dyscharachthis* 属のシノニムであることが判明し、上記のように改められたので、ここではその処理にしたがった。

1 ex., 北海道陸別町小利別, 22. VII. 2002, 露木繁雄採集。

短報を書くにあたり、標本をご提供いただいた神奈川県露木繁雄氏に感謝したい。

参考文献

FLEUTIAUX, E., 1923. Les Melasidae du Japon (Coléoptères). *Annls. Soc. ent. Fr.*, 91: 291-328.

MUONA, J., 1993. Revision of the phylogeny, classification and biology of the family Eucnemidae (Coleoptera). *Ent. scand. Suppl.* 44: 1-133, 279 figs.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○ムネアカツヤキマダラコメツキのレクトタイプ標本紛失か?

ムネアカツヤキマダラコメツキ *Gamepenthes antennatus* (MIWA, 1934) は、台湾の Kwarenkô で採集された個体数不明の個体に基づいてツヤハダコメツキ属 *Athous* の種として最初記載されたものである。筆者は、1986年に台湾省農業試験所を訪ね、3個体のシタイプ標本を調査し、本種が *Gamepenthis* キマダラコメツキ属に所属するものであることを確認し、台湾のカタログをまとめた際に、このうちの♂個体をレクトタイプに指定した (SUZUKI, 1999)。そして、2000年の3月、台湾省農業試験所を訪ね、用意したレクトタイプのラベルを付けようとしたところ、レクトタイプに指定した標本だけが標本箱から紛失していることが明らかになった。

真っ先に、1999年9月21日の台湾中部大地震のことが頭に浮かんだが、周博士によれば標本にはそれほど大きな影響はなかったということであった。標本がたとえ落ちてラベルまで紛失することは考えにくいので、この間にコメツキムシの標本を調査した方についてもお聞きしたが、まったく心当たりがないということであった。念のためコメツキムシのコレクション全体を再調査したが、残念ながら発見することはできなかった。すみやかにこの標本の所在が明らかになることを望みたい。

この小文を書くに当たり、台湾省農業試験所の標本を調査する機会を与えてくださった、同試験所の周博士に厚くお礼申し上げます。

参考文献

SUZUKI, W., 1999. Catalogue of the family Elateridae (Coleoptera) of Taiwan. *Misc. Rep. Hiwa Mus. nat. Hist.* (38): 1-348.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

◇2002年度採集例会報告◇

2002年度の日本鞘翅学会の採集例会は7月27日から28日にかけて、昨年と同じ山梨県の鳳凰三山のふもとの御座石鉱泉において行われた。1998年、1999年、2000年の和佐又山、昨年の御座石鉱泉と5年続けて日本甲虫学会との合同開催である。参加者は両方合わせて14名であり、こじんまりした集いであった。今年は桜が3月中旬に咲いたように、すべてが早い年であったせいか花のつきが悪く、かつ乾燥していて御座石鉱泉付近では、昨年よりも虫が少なかった。



日本甲虫学会・日本鞘翅学会
合同採集会

水野 渡上 米田 日尾 伊藤 林
私 坂 田 尾 藤 林
造 弘 夫 祐 留 夫 幸

大松 内初 野木 斎
木原 藤宿 村社 藤
裕 準 成 英 依 昌
裕 豊 哉 彦 世 二 弘

夕食後の懇親会で親睦を深めた後、小屋の屋上でナイターを行い、ナイター組みと懇親会継続組と二手に分かれた。ナイターでは生まれて初めてセスジムシを採集することができた。ハネカクシ類の飛来

は多かったが、カミキリ類はたいしたもののが来なかった。

翌日は甲虫学会の有志(勇士)が鳳凰小屋まで上がったようであるが、青木鉱泉方面に車で出かけた。青木鉱泉周辺はノリウツギ、リョウブが咲き、沢の石の下には、ゴミムシ類がそこそこみられた。田尾美野留氏はヒメヨツズジハナカミキリを採集している。例年採集例会では例年面白いものを採集しているが、今年は採集よりも親睦がメインであったといえる。

採集品をその場で同定していただけるのが合同採集例会の魅力のひとつであり、横浜市北部の甲虫なんでも屋をめざす私にとって今年も、貴重な同定基準標本のコレクションを増加させることができた点で大変有意義であった。

来年も甲虫学会との合同採集例会を予定している。場所としては、3年前に戻って和佐又山が候補に上がっている。正式に決定した時点で別途案内状が配布される予定である。

(神奈川県横浜市, 大木 裕)

◇大会報告◇

2002年度日本鞘翅学会第十五回大会は日本甲虫学会との合同で、“02 Japan Coleopterist' Meeting”として、11月23日~24日の2日間、大阪市立自然史博物館において開催された。日本の甲虫研究の二つの学会が初めて合同で開催した記念すべき大会であり、基調講演1件、特別講演3件、口頭発表17件、ポスター発表6件と講演、発表の件数は過去最高であった。

佐々治先生の基調講演に加えて、佐藤正孝先生、森本先生、野村周平氏の特別講演が行われたことは例年の大会の2年分以上に相当し、合同大会ならではの豪華版であったと言える。

佐々治先生はまず、分類学の基本である、採集、標本の収集・保存、文献、装置、貯蔵空間の五要素について最近の進歩を紹介された。次に1989年の日本産昆虫総目録以降の増加を考察して、甲虫の各Familyがどの程度解明されているかについて5段階評価で紹介され、まだまだランクDやランクEのFamilyが多く、種数が今後まだまだ増加してゆく可能性を示された。日本の甲虫分類学が狭義の意味での虫のプロだけでなく、実に多様なバックグラウンド、職種の人材によって構成されていることを強調され、今後の種数解明への更なる努力の大切さを静かな中にも熱く語られた。

佐藤先生は松下松年教授以降、河野教授、三輪勇四郎先生、中條道夫先生を中心として発展して来た日本甲虫研究の足取りを、貴重な写真を交えて紹介された。特に戦後数年の間に数多く出現し、消えて行った会合・同人雑誌が現在の学会にどうつながってきたかの解説は私にとって初めてであり、今まで断片的に聞いていた話をはじめてつなげることができ

た感がある。まさに今回の合同大会のエポックにふさわしく、過去の連続した足跡を若い世代につなげて行くお話であった。

森本先生はゾウムシの吻に関して、形態と機能の関係に関する過去の観察報告を紹介され、その緻密さを強調された。形態、機能と生態観察から日本産ゾウムシ上科の系統関係の推定を紹介されたが、私にはもっとじっくり虫を観察しろというメッセージが感じとれた。

野村氏は「月刊むし」において、5年間甲虫会の年間回顧記事を担当された立場から、5年間の記載の動きを紹介され、これから先どのような方向へ行くかの展望を話された。ここ5年間の日本のファウナは年間100種程度の記載が続いているにもかかわらず、日本の学術誌上での記載数が減少されていることを指摘され、今押し寄せている独立行政法人化や外来種問題などの外部要因を乗り切るためには

- 1: アマチュア研究者のレベルアップ
- 2: 分類研究者および学会誌の地位向上のための努力
- 3: IT情報化の流れに取り残されないこと

の三つが大切であることと強調された。

同定会は同定していただけの講師陣が豊富で、今まで以上に多くのFamilyに対応できたと考える。これも合同大会ならではの感じた。分科会は、ゴミムシ、ハネカクシ、甲虫DNA、ゾウムシ、カミキリ、雑甲虫の6分科会が開催され、専門分野でのトピックスやレビューが紹介された。どれも興味があるものばかりであり、体がひとつしかないのが大変残念であった。

参加者は170名であり、首都圏以外の開催としては過去最高であった。

(神奈川県横浜市, 大木 裕)

◇役員の変更◇

昨年度の日本鞘翅学会第15回大会(於大阪市立自然史博物館, 11月23~24日)において開催された総会において、2003年~2004年の新役員(第8期)が選出されました。

日本鞘翅学会役員(第8期)

(°は新所属; *は兼任)

- 〈会長〉°高桑正敏
 〈副会長〉°新里達也
 〈常任幹事〉渡辺泰明(総務・庶務); 野村周平(同); °岸本太郎(同); 齊藤明子(会計); *新里達也(編集); 上野俊一(英文誌編集長); °鈴木互(和文誌編集長); °大林延夫(渉外); °高橋和弘(企画); °露木繁雄(同)
 〈幹事〉安藤清志; 荒谷邦雄; °平野幸彦; °林 靖彦; 今坂正一; °小島弘昭; °大原昌宏; °大木 裕; °齊藤秀生; 酒井雅博; °佐藤正孝; 初宿成彦

- 〈会計監査〉°藤田 宏; °岩田隆太郎
 〈英文誌編集委員〉*上野俊一(編集長); 近 雅博; 森本 桂; *新里達也(編集幹事); *野村周平; *大原昌宏; 佐々治寛之
 〈和文誌編集委員〉*鈴木 互(編集長); 長谷川道明; 川島逸郎; 奥島雄一; 吉富博之
 〈自然保護委員〉*野村周平(委員長); °荒谷邦雄(副委員長); 藤田 宏; 平野幸彦; 今坂正一; 苅部治紀; 森本 桂; 森田誠司; 新里達也; 大林延夫; 大木 裕; 齊藤秀生; 佐藤正孝; 高桑正敏; 上野俊一

◇会則の改正◇

また、上記総会において会則改正の議決がなされ下記のように改正がなされた。本改正は委員の負担を減らすためと、電子メールによるやりとりで連絡の円滑をはかるということで提案、議決された。

(旧会則)

第4章 運営機関

第22条

3. 常任幹事会

- ロ. 会長の召集により年4回以上開催する。

(新会則)

第4章 運営機関

第22条

3. 常任幹事会

- ロ. 会長の召集により年2回以上開催する。

(総務・庶務担当, 岸本年郎)

甲虫ニュース 第141号

発行日 2003年3月31日

次号は2003年6月下旬発行予定

発行者 高桑正敏

編集者 鈴木 互(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社